



私の

東京物語

全10話

6

一九七六(昭和五十一)年に一橋大学法学部へ入学した僕は、フランク・アキラさんの至言「自分は方角を間違えて阿呆学部あほうぶくに入学した」を拝借し、授業よりもアルバイトに精を出す日々を過ごします。

英語と数学を高校生に教える週二回の家庭教師に加えて、婦人服の三愛が銀座四丁目交差点脇のドリームセンター店、新宿駅東口の武蔵野館の新宿店に設けていたブースで、AORと呼ばれる欧米の都会的な楽曲をかけておしゃべりする週二回のDJ。バイト代は、南青山のパイロパイパーハウスで輸入レコード、銀座のイエナ洋書店で洋雑誌を買うための原

なかと やすお
田中 康夫



卒業直前の停学

資でした。

〈お勉強〉が苦手だった僕ですが、国際関係論の細谷千博ゼミに在籍する一方、商学部の田内幸一ゼミにも自主的に参加し、マーケティングを学びました。卒論は「英連邦に於ける有色移民制限立法」に関して。「人口問題」には当時から関心を抱いていたのですね。

日本興業銀行(現みずほ銀行)に内定しますが、好事魔多し。卒業直前に停学処分を受けて留年。学園紛争後の東京という街に生きる若者が主人公の小説を誰か書いてくれないかなあ、と以前から思っていた僕は大学の図書館で、生まれて初めての作品に取り組みます。(作家)

大学1年夏、英国のダウニング街10番地、首相官邸前で